

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2673000127		
法人名	三菱電機ライフサポート株式会社		
事業所名	長岡京ケアハートガーデングループホーム西山の郷 (ぼたん)		
所在地	京都府長岡京市奥海印寺三反田8-1		
自己評価作成日	令和4年3月5日	評価結果市町村受理日	令和5年4月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhou_detail_022_kani=true&JigyoSyosyoCd=2673000127-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 きょうと福祉ネットワーク「一期一会」
所在地	京都府京都市右京区西院久田町5番地
訪問調査日	令和4年3月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

昨年はおひとりの看取りがあり、コロナ禍であったができるだけご家族と居室で共に過ごす時間をつくり、ご家族と過ごす環境をつくり、「この状況下で・・・」ととても喜ばれた。息子様との確執も知っていたがそれ以上に深く、最期にホームで共に過ごした時間があって今までの父への思いが変わり本当に良かったとその時間がなかったら後悔しただろうという話をお聴きして、あらためてご家族の思いを感じた。ご本人と笑顔の写真を撮ることができた。看取りは職員がするものではなく、ご家族との絆の確認やこれからのご家族にとっての時間であると職員も感じた看取りであった。これからはご家族にとって悔いのないかわり方ができるように支援をしていきたい。またお一人おひとりの人生に向き合い、学び、思いやりのある温かいケアを職員一同目指していきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「西山の郷」は、阪急長岡天神駅から車で約5分、JR長岡京駅から車で約10分のもどかな住宅街にある3ユニットからなるグループホームです。近隣には、きりしまつじで有名な長岡天満宮、紅葉が美しい光明寺など、歴史ある寺社仏閣や公園があります。事業所の敷地内には、適所に花や植物が植えられており、コロナ渦において外出等が制限される中でも庭のテールでティータイムをしたり、周辺を散歩するなど工夫をされています。支援においては、食事の時間は一緒に談笑しながら摂るなど常に寄り添いながら歩む姿勢をチームで大切にされています。また、開設から19年目が経過し、高齢化・重度化をむかえるなか、看取りの支援にも力を入れており、職員は日常的に看護職員から医療的ケアを学び医療連携を強化して、利用者本位のケアに努めておられます。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員は理念を周知しており、「個人の尊厳」を大切に本人の気持ちを汲み取り、受け入れて実践に繋げている。	理念を事業所内に掲示するとともに朝礼等で唱和をして職員間で意識を高めている。利用者一人ひとりのリズムを大切に寄り添う姿勢が全職員に徹底され、押し付けないで各々にあった声掛けをしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ボランティアの先生との交流、長岡天満宮の書初め展に出展した。また去年は社会福祉協議会を通じてボランティアが作成されたクリスマス会用のDVDを頂き、楽しむことができて感想をお伝えしてお互いの励みとなった。	コロナ渦の中でも書道、演奏等のボランティアの来訪やDVDをもらい交流を深めたり書道展への出展など工夫をされていた。以前は、日常的に地域の方と気軽に挨拶したり、子ども神輿や獅子舞の訪問があった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	例年では中学生の職場体験学習を受け入れることで、認知症の人の理解や支援の方法を発信している。地域の方から相談事があった時にはホーム長にも伝えて、支援の方法が伝えられている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、フロアの取り組みや状況も報告して意見を頂き、ケアの向上に繋げている。ご家族の意見から気づくことがある。	会議には、家族・民生委員・行政・地域包括支援センター等の参加があり、地域の情報を得る機会になっている。参加者からは具体的な助言、意見を得てサービス向上に反映させている。(コロナ渦は対面と書面にて開催。)	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議委員会では、近隣の方や、行政・地域包括支援センターの方が含まれており、話し合い、協力体制と信頼関係を構築している。	高齢介護課・地域包括支援センター職員が運営推進会議に出席し、市町村との情報交換や具体的なアドバイスを得る機会となっている。市町村とは普段から協力関係を構築して、地域ケアについて情報共有している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束だけでなく言葉による拘束も含めユニット会議において研修を行い、職員の意識向上に努めている。フロア間も自由に行き来ができる環境である。	日中は玄関等の施錠はせず、各階の移動も自由にできるようにしている。ユニット会議で事例シートを用いた研修を行ったり、アンケートを実施して「入居者の行動を抑制するような言葉」等を職員同士で注意し合っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	不適切なケアが虐待とならないように職員間で技術の向上に努めている。ストレスのないようにお互いに助け合える職場環境をつくっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	1名の方が後見人制度を利用されている。成年後見制度を学びより理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学時にホームの雰囲気を感じてもらったり、面談の時に不安や疑問点を出してもらい話し合いをすることで、理解や入居への安心に繋げている。医療的なことなど、できること、できないことを説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進委員会開催を全家族にお知らせしている。自由に意見が出し合えて、情報提供の場となってサービスの向上に繋げている。	面会等制限のある中で手紙、電話、広報紙の送付など日頃から家族とのコミュニケーションを密にとっている。運営推進会議の中でも意見を聴き取り運営に反映している。利用者には日常的に聴き取っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議、リーダー会議を通じてボトムアップの体制となっている。	ユニット会議(月1回)には、全職員が参加して、意見や提案ができる。管理者は、日常的に声を掛けて信頼関係を築いている。毎年、個人目標の自己チェックを基にホーム長との個人面談(年2回)の機会がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の希望する働き方を大切にしてシフトを作成している。希望公休、有給休暇も取りやすい環境である。プライベートな部分も相談できて、介護休暇を取るなど離職への回避に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ユニット会議では年間の計画に沿って内部研修を実施している。 行政の主催する研修に参加する機会もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	通所介護事業所連絡会では「コロナ禍でのレクリエーション」の研修があり、同業者との交流や学びをサービスの向上に繋げている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期面談により体調や歩行状態などを確認して、安心安全な環境となるように把握に努めている。今までの生活歴や、趣味、環境など継続できるように努めている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の思いを汲み取り、困っている事や今後の不安を受け止め、安心に繋げている。気になったことなどは、いつでも話して頂けるようにお伝えをしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要があればベッドの手配や福祉用具の説明をしている。環境の変化にともなうご家族の心配を汲み取り支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	配膳や下膳、テーブルを拭く、洗濯物を干す・たたむなど今まで生活の中でされてきたことを継続して、一緒に生活感をもって暮らしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会もままならぬ状況であるが、電話で様子をお伝えして、ご家族との絆が途切れないうように努めている。体調面などは相談をして一緒に情報を共有している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている	コロナ禍であってもご家族やこれまでに大切にされてきた人との付き合いが途切れないうように、感染予防に努めて交流できるように努めている。	コロナ渦の中でも、お手紙や年賀状、ラインを通じて馴染みの関係性が途切れないう支援を行っている。(以前は散髪や編み物教室に通っていた方もいた。)	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常は居室で過ごされている方も、行事やお誕生会には無理なく、短時間でもリビングに来られて他者と関われる環境をつくっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居されてからも、ご家族について相談の電話を頂くこともあり、継続的な信頼関係の構築に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご入居者の家に帰りたい気持ちや、不安な気持ちを、コミュニケーションやスキンシップを通して寄り添っている。言葉に出しにくいことを理解し、表情により思いを知るように努めている。	センター方式を活用し、思いや意向の把握に努めている。会話・表情から、気持ちを汲み取る意識を常に持つようにし、寂しさや不安な気持ちには、寄り添い、居室で話すなど、丁寧な対応をしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人との何気ない会話の中や面会時でのご家族からのお話をユニット会議で共有して、ケアに活かしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎朝のバイタルチェックと水分摂取量、排便チェックを行い、体調の管理を行っている。顔色や歩行の状態、言動より変化を察知している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のユニット会議でカンファレンスをして意見を出し合い、本人の望ましい全体像をとらえて、介護計画に繋げている。	本人や家族の意向を基にセンター方式や24時間シートを活用し、詳細なアセスメントを行い作成している。月1回開催するユニット会議にてモニタリングを実施している。かかりつけ医、看護職員、栄養士と連携をしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌や介護記録を個別に記録して職員間で情報共有をし、経過が振り返られるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	在宅で生活されていた時に利用されていた訪問ヘルパーより情報を得たり、顔なじみの関係により、協力をしてもらっている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアの書道の先生、長岡天満宮の書初め出展、社会福祉協議会からの情報が地域の社会資源となっている。ご入居者が少人数で集える場所の提供があればコロナ禍前のように利用したいと考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	今までにかかられていた主治医との信頼関係を大切にして継続している。「在宅療養手帳」を利用し、主治医、看護職員、職員、家族が連携をして体調の見守りをしている。	入居前からのかかりつけ医の方が多く、乙訓地域独自の自宅療養手帳を活用して、途切れない医療が受けられるよう支援されている。受診は原則家族が行い、必要に応じて職員が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	必要時に医師への連絡をしてもらったり、相談やアドバイスももらいながらケアに活かしている。退院後のケア、看取り時などその時々に必要なアドバイスも頂いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には日々の生活の様子を含めたサマリーの提出や、退院支援の看護師やソーシャルワーカーなどと連携し、現状の確認や退院後のケアを含めて情報の交換をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	普段の会話よりご本人の気持ちを察したり、ご家族の意向を必要時に確認をしている。看取りではない場合も状況により主治医よりご家族に説明をしていただくこともある。看取り時には状況を説明して文書でターミナル時ケアの同意を頂いている。	入居の段階で事業所の重度化や終末期の対応方針を説明して同意を得ている。医師、看護師、職員が時期に応じて必要な説明をして、不安を取り除き家族支援にも努めている。その人に応じた終末を支えられるように職員は研修を重ねている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変が予測されるときは、リーダー、ご家族、医師などへの連絡方法を確認し合っている。夜間の急変や事故の時に他階の応援もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力を得て年2回消防訓練を行っている。お一人おひとりの状況に合わせた避難の方法を確認している。新人の職員は訓練用の消火器で練習させてもらっている。	地震・火災を想定した訓練を消防署の協力を得て年2回実施している。災害時の連絡網や避難経路を整備するとともに同時に、通報の仕方について職員間で確認している。備蓄として水・食料(地域用含む)を準備している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を尊重した言葉がけとなるように気を付けて、プライバシーを守る接し方に努めている。	職員は利用者の尊厳に配慮した対応や丁寧な言葉がけをしている。また、部屋への入室の際など必ずドアノックすること、氏名は名字で呼ぶことを原則にして小さなことまで、プライバシー確保の意識を持つようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その人の生活のペースで過ごして頂いている。ご入居者の気持ちや状況に合わせてレクリエーションを行っている。言葉が出にくい方には、自己決定がしやすいように選択して頂けるように工夫をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	気持ちが落ち着かない時は、その人の気持ちに添って一緒にいることで安心して頂いている。これまでの生活歴も踏まえて支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理美容をお願いして希望のカットをお願いされている。一緒に衣類を選ぶなど支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事が始められない方には横と一緒に座り声をかけたり、お箸を持っていただくなどして食事を意識をしていただいている。節分の日はお一人おひとりに巻きずしを巻いていただいた。	各ユニットで工夫して調理し温かいものを提供している。食事の時間を大切に考え、職員も一緒に食事を摂り、利用者の隣でさりげない声かけと介助をしている。調理や後片付けなどできる方にはしてもらっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事が摂りやすい時間を観察したり、食事のしやすい形態を食材によって変えている。舌でつぶせる柔らかいものは、大きさを変えたりして食事が安全に楽しくできるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアと義歯具も見て清潔に安全に装着できているかの確認や不具合があれば歯科を受診している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	食事前にトイレを促したり、排泄のリズムを観察して気持ちよく過ごして頂けるように支援している。ベッドで過ごされている方も、居室でポータブルを使用して介助にて座っていただき排泄をしていただいている。	排泄チェック表を活用して個々の状況を把握している。排泄チェック表は目立たないところに設置してプライバシーに配慮している。タイミングを見たり、様子を観察して、トイレに誘導することを基本としている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	腹部の圧迫による負担がないように排便のコントロールを行っている。水分の量や、適度な運動、食事量もみて便秘を予防している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	お一人おひとりの好む時間や気分の良い時間を把握している。入浴が負担になる方も毎日の清拭で清潔を保持している。	原則週2日としている。無理強いすることなく、代替方法等(シャワー浴や足浴など)で、清潔を保つようにしている。できる限り希望時間帯の入浴に努めている。2階には車椅子の方も入れる浴槽があり、身体状況に合わせた入浴も可能となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活習慣や体調に応じて、休息や安眠ができる環境を整えている。夜間に寝付けない時はホットミルクを飲んで頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の効用、副作用についての理解を深めて、ご入居者の体調管理を行っている。薬の変更があった時には様子観察を行い、情報を共有して経過を報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日日課として食事のメニューやご自身の体温や血圧記録している方がいつまでも継続できるように職員も温かく見守って、数値が記入しやすいように協力をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出の機会が減ってしまったが、近くのコスモス畑に散歩に出かけたり、外気に触れる機会をつくるように努めている。	外出の難しい中、天気の良いとき、少人数でベランダや1階の庭のテーブルでお茶をしたり、周辺を散歩したり花の水やり、植え替えなどで外気に当たるようにしている。以前は、地域にある寺社仏閣や、自然が楽しめる名所があり、梅見や花見など様々な機会をつくっていた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金の所持はしていないが、毎週金曜日には移動市場があり、買い物を楽しめる環境がある。コロナ禍でなければ、一緒に買い物に出かけられる環境である。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族に連絡があるときには、受話器に出て頂き声を聴いて、お互いに安心されている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有スペースにご入居者で作成された季節の作品を飾っている。展示を見て達成感を持ってもらったり、会話も弾んで、次の意欲へとつながっている。	共用空間は特に明るく日当たりのよい場所に位置し、1階は外の景色、2、3階は広いベランダから外の景色が見えて開放感があり、適所に植えられた花や植物もあって、季節感が感じられる空間づくとなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにおいても、新聞を読んだり、テレビを見たり、パズル、編み物等思い思いの時間を過ごすことができている。またテーブルのお向かいの方に指体操を教えて一緒にされている光景もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族と相談をしてテレビやラジオを持ってきていただいてご本人が居室でも居心地よく過ごせるように協力をしていただいている。	居室は家族や職員と一緒に整理整頓し清潔で、自宅に暮らしているような雰囲気を感じられる。和室で6畳二間続きの部屋もあり、より自宅のような空間の広さを感じて、心地よく過ごせる空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室扉は名前が入ったプレートが掛けられていてご自身の部屋を確認することができている。廊下には手すりが設置されていて、できるだけ安全に歩行ができるように見守りをしている。		